

『とほすがたり』の複合動詞

— 数量的概観 —

岡 野 幸 夫

目 次

- 一 はじめに
- 二 作業の手順
- 三 『とほすがたり』の複合動詞語彙
 - 三・一 数量的概観
 - 三・二 平安時代の日記作品とのみ共通して用いられる複合動詞の検討
 - 三・三 平安時代和文に用いられない複合動詞の検討
- 四 おわりに

一 はじめに

本稿は、鎌倉時代後期に成立した女流日記文学作品である『とほすがたり』を対象として、そこに用いられる複合動詞語彙が、平安時代和文の複合動詞語彙をどの程度受け継いでいるか(または、受け継いでいないか)を明らかにしようとするものである。これは、「和文体に用いられる複合動詞語彙には時代差や文体差が存するか(注一)」という問題を考察

『とほすがたり』の複合動詞

するための一階梯である。

本稿では、ほぼ同時期に成立したと考えられる中世王朝物語作品『あきぎり』（鎌倉時代末期、または室町時代成立か）と比較しながら、『とはずがたり』の複合動詞語彙の構成を概観する（注二）。また、平安時代の日記作品とのみ共通して用いられる複合動詞や、平安時代和文に用いられない複合動詞について、現段階までに検討しえた事柄についてもふれる。

比較・検討にあたっては、以下の諸点に注目した。

- ・平安時代和文に用いられているかどうか
- ・平安時代の物語作品に用いられているか、日記作品に用いられているか
- ・『あきぎり』の複合動詞語彙とどの程度一致するか

使用したテキストは以下の通り。

○『とはずがたり』

辻村敏樹編『とはずがたり総索引』本文篇・自立語篇（笠間書院・平成四年）

ただし用例文は岩波新日本古典文学大系による。

○『あきぎり』

市古貞次、三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第一巻所収本文（笠間書院・昭和六三年）

二 作業の手順

『とはずがたり』の個々の複合動詞（注三）について、それが平安時代和文に用いられているかどうかを確認し、分類した。確認にあたっては、各作品について刊行されている語彙索引類を利用した（注四）。

『とはずがたり』の複合動詞の収集は、索引の見出語によつたが、用例文にしか現われない複合動詞も存するので、用例文をも検索して収集した。

この結果七三四語(異なり語数)の複合動詞を収集した。動詞五語以上からなる複合動詞はみられなかった。また、四語からなる複合動詞はいずれも二語ずつに分解でき、意味上明確な区切れが認められるため、分解して扱った。三語の複合動詞はそのまま収集した。

以下に、四語からなる複合動詞の全用例を参考までに掲げておく。

○いでたちひしめきあふ(出立舞合)

・九月には、御花、六条殿の御所のあたらしきにて、はえぐしきに、新院の御かうさへなりて、「女房たち、あいにたまはらん」など申させ給ほどに、めむくに心ことに出たち、ひしめきあはるれども、(巻二・一八〇頁)

○かきくらしふりつもる(播暗降積)

・雪さへかきくらしふりつもれば、ながめのすゑさへみちたえはつる心ちして、ながめたるに、(巻四・一八四頁)

○とりそへおもひいづ(取添思出)

・かまくらのほどは、つねにかやうによりあふとて、「あやしく、いかなる契などぞ」と申人もあるなどきしも、とりそへおもひいでられて、(巻四・一八九頁)

○とりわきとめく(取分求来)

・ひるはひめもすにふしくらし、うとき人もちかづけず、心しる人二人ばかりにて、「ゆみづものまず」などいへども、とりわきとめくる人のなきにつけても、あらましかばと、いとかなし。(巻一・四八頁)

・このたびのありさまは、ことにしのびたさまに、東山のへむにゆかりある人のもとにこもりゐたれども、とりわきとめくる人もなく、身をかへたる心地せしほどに、(巻三・一四八頁)

『とはすがたり』の複合動詞が平安時代和文に用いられている場合には、さらに物語作品に用いられているか、日記作品(注五)に用いられているかによって分類した。

また、平安時代和文に用いられているかどうか、という観点とは別に、中世王朝物語作品である『あきぎり』に用いられているかどうかをも確認し、分類した。

三 『とはすがたり』の複合動詞語彙

三・一 数量的概観

〔表一〕は、『とはすがたり』『あきぎり』に用いられている複合動詞が平安時代和文に用いられるかどうかという観点から分類した表(上の二段)と、両文献の複合動詞語彙の重なり具合を示す表(下の四段)とからなる。表中、「とノミ」「あノミ」と・あ共通」は、それぞれ『とはすがたり』と『あきぎり』とを比較して『とはすがたり』にのみ現れる。『あきぎり』にのみ現れる。『とはすがたり』と『あきぎり』の両方に現れる」という意味である。また、()内の数字は上の二段と下の四段とでは見方が異なる。上の二段では左端の「合計」欄に対する割合を示し、下の四段では下端の「合計」欄に対する割合を示す。

この表から、次の諸点を指摘することができる。

〔表一〕の上の二段部分から、『とはすがたり』の複合動詞語彙は、『あきぎり』と比較して平安時代和文との一致度が低いことがわかる。特に日記作品との一致度が低く、全体の半分にも満たない(二・七%+四五・四%||四八・一%)。『あきぎり』が物語作品と九割以上一致している(五六・三%+三四・七%||九一・〇%)のに比較して対照的である。これと表裏をなすように、『とはすがたり』では、平安時代和文には用いられない複合動詞が二七・二%を占める。また、

平安時代の物語作品にのみ用いられている複合動詞が二四・七%を占める。

すなわち、『あきぎり』が平安時代の物語作品の複合動詞語彙を積極的に用い、その枠内からほとんどはみだしてないのに対し、『とはすがたり』は平安時代の日記作品の複合動詞語彙をあまり用いず、平安時代の物語作品の複合動詞や平安時代和文にみられない複合動詞をも用いているのである。このことから、『とはすがたり』は『あきぎり』とは異なり、和文語彙を特に制約なしに用いていることがわかる。この点が物語作品と日記作品との文体差を表わしたものであるかどうかについては、今後他の作品の検討を通して明らかにしてゆきたい。

〔表一〕『とはすがたり』『あきぎり』の複合動詞語彙の構成

合 計	平安時代和文に					と は す が た り	あ き ぎ り	と ノ ミ	と ・ あ 共 通	あ ノ ミ	合 計
	な し	あ		り							
		小 計	物 語	共 通	日 記						
七 七	三 〇〇 (三・七%)	三 五 (七・八%)	一 八 (二・四・七%)	三 三 (四・三・四%)	一 〇 (一・〇%)	三 〇 (三・九%)	三 六 (四・五・三%)	三 〇 (四・一%)	二 九 (三・七・三%)	一 四 (一・六%)	三 四
七 八	三 〇〇 (三・七%)	三 四 (七・八%)	一 六 (二・三・七%)	三 六 (四・三・四%)	一 〇 (一・〇%)	三 〇 (三・九%)	三 六 (四・五・三%)	三 〇 (四・一%)	二 九 (三・七・三%)	一 四 (一・六%)	三 四
五 七	三 五 (五・七%)	三 六 (四・六%)	一 九 (二・六%)	三 七 (四・六・四%)	一 〇 (一・〇%)	三 五 (四・七%)	三 六 (四・五・三%)	三 〇 (四・一%)	二 九 (三・七・三%)	一 四 (一・六%)	三 四
一 〇 五	三 三 (三・〇・四%)	三 七 (三・九%)	二 七 (二・九%)	三 九 (四・一%)	一 〇 (一・〇%)	三 五 (三・七%)	三 六 (四・五・三%)	三 〇 (四・一%)	二 九 (三・七・三%)	一 四 (一・六%)	三 四

次に〔表二〕の下の四段部分からは、『とはすがたり』の複合動詞語彙は、『あきぎり』との一致度が低い(二四・九%)ことがわかる。平安時代和文との一致度が七二・八%であるのに比較して対照的である。特に平安時代和文にみられない複合動詞の一致度が低い(一致するのは「さめやる(賞遣)」の一語のみ)。同時代の文献であればもう少し一致度が高くなることが予想されるが、実際はそうなっていない。

このことは、日記作品と物語作品といった文体差によって、用いられる複合動詞語彙に相違が現われることを示しているようにも見える。この点についても、今後他の作品の検討を通して明らかにしてゆく必要がある。

三・二 平安時代の日記作品とのみ共通して用いられる複合動詞の検討

前項において、『とはすがたり』には平安時代の日記作品にのみ用いられる複合動詞があまり用いられないことを指摘した。本項では、これらの複合動詞(二十語)について検討する。「表二」は、その内訳を表にしたものである。このうち、「まうしうけたまはる」は二例、その他の複合動詞は一例ずつ存する。(注六)

これらの複合動詞の用例を検討した結果、いずれも平安時代の日記作品と同じ意味用法で用いられていることが明らかになった。強いて問題になりそうなものをあげるとすれば、「おきかさぬ(置重)」と「すぎく(過來)」であろうか。

○おきかさぬ(置重)

・かたつかたにふみども、わざとをきかさぬし人も侍らずなりにし後、てふるゝ人もことになし。それらを、つれぐせめてあまりぬるとき、ひとつふたつひきいでゝ見侍るを、(紫式部日記・下・三一頁)

・「あらぬさまなる朝がへりとや、世にきこえん」などいひて、かへるさのなごりもおほき心ちして、

わかれしもけさの名残をとりそへてをきかさぬる袖の露かな(とはすがたり・巻一・三一頁)

○すぎく(過來)

・いとくらくなりて、三条の宮のにしなる所につきぬ。ひろぐとあれたる所の、すぎゝつる山くにもおとらず、おほきにおそろしげなるみやま木どものやうにて、みやこの内とも見えぬ所のさまなり。(更級日記・三八二頁)

・くるれば契をまち、あくればなごりをしたひなどしてこそすぎこしに、おもひすてゝこもりあたるもありがたくおぼえて、(とはすがたり・巻五・二二四頁)

〔表二〕平安時代の日記作品にのみ用いられる『とはすがたり』の複合動詞

複合動詞	日記作品	土左	蜻蛉	枕	紫	和泉	更級	讃岐	合計
いそぎみゆ (急見)			1						1
うちおどろかす (打驚)									
うちかづく (打被・四)									
うちきる (打切)									
おきかさぬ (置重)									
おもひいだす (思出)									
かきふる (書居)						1			1
かくろへゐる (隠居)									
きあつまる (来集)									
ささちる (咲散)									
しのびく (忍来)									
すぎく (過來)									
たちかさなる (立重)									
とりわする (取忘)									
ねおどろく (寝驚)									
のりうつる (乗移)									
ひきのす (引垂)									
まうしうけたまはる (申承)									
わたりわづらふ (渡煩)									
ゐそむ (居初)									
合計		4	1	15	3	1	3	2	28

『とはすがたり』の複合動詞

「おきかさぬ」は書物を重ねて置く意（紫式部日記）と、父の死による涙と朝の別れの涙とを重ねて袖に置く意（とはすがたり）という違いがある。また「すぎく」は空間的な推移（更級日記）と時間的な推移（とはすがたり）という違いがある。しかし、この違いは時代や文体によるものとは認めにくいと思われる。

これら以外の複合動詞はいずれも平安時代の日記作品と同じ意味用法で用いられていた。中には非常に近い場面で用いられているものもみられた。以下にいくつかの用例を示す。

○うちおどろかす（打驚）

・まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木のしたをぐらきに、（中略）後夜のかねうちおどろかして、五だんの御ずぼうの時はじめつ。（紫式部日記・上・二五三頁）

・いまだ夜ふかきに、あまたちのおき出て、後夜おこなふに、そくじやう院のかねのをともうちおどろかすに、われもおき出て、経などよみて、（とはすがたり・卷二・一〇四頁）

○たちかさなる（立重）

・所もなくたちかさなりたるに、よきところの御くるま^人たまひゝきつゝきておほくくるを、いつこにたゝむとすらんとみるほとに、（枕草子・よろつの事よりもわひしけなる車に）

・すでに、将ぐん御つきの日になりぬれば、わか宮こうぢは所もなくたちかさなりたり。（とはすがたり・卷四・一八二頁）

これらの複合動詞は、時代による変化を起さなかつたものであるといえようが、それが二十語しかみられないということは、日記作品の複合動詞は時代による変化が激しい、あるいは作品ごとの相違が大きいということを表わしているものと思われる。今後、他の日記作品の複合動詞語彙についても調査を行ない、日記作品の複合動詞語彙の特徴について考察する必要があるであろう。

三・三 平安時代和文に用いられない複合動詞の検討

本項では、『とはずがたり』の複合動詞のうち、平安時代和文に用いられないものについて検討する。これは二百語みられるが、このうち以下に述べる複合動詞は今回の考察の対象からは除外することとする。

〈敬語を構成要素に持つもの〉

これは、敬語形自体は平安時代和文には現れないが、原形ともいうべき非敬語形が平安時代和文に存在し、その派生形と認められるものである。これらは『とはずがたり』ないし鎌倉時代に特有の複合動詞とは認められないため、検討の対象からは除外する。もちろん、敬語を構成要素に持つものがすべてこれに該当するわけではなく、非敬語形であっても平安時代和文に用例がみられないものもあり、それについては今後検討を要する。

〈三語からなるもの〉

これらの複合動詞はいずれも「一語十二語」あるいは「二語十一語」という語構成であり、そこから抽出される二語からなる複合動詞の中には平安時代和文にみられるものが多い。三語からなる複合動詞の造語法は二語のそれより複雑で同列には扱えないし、しかも既刊の索引類に立項されていない場合はその存在を見逃してしまう恐れもある。したがって、今回の検討の対象からは除外する。

〈構成要素の一方が接頭語化あるいは補助動詞化しているもの〉

これは、既存の造語法を用い、新たな組み合わせを生み出しているものである。平安時代和文において一般的な接頭語や補助動詞による造語法が、『とはずがたり』においてもさかんな造語力を発揮していると思われるもので、今回はこれ以上の検討は行なわない。

これら以外の複合動詞のうち問題となるもので、これまでに検討しえたものについて以下検討する。二例以上用例が

『とはずがたり』の複合動詞

あるものは、その数を付記している。

〈漢語サ変動詞を構成要素に持つもの〉

ここに属する複合動詞には次のようなものがある。

あんず(案) — つづく(統・下二・一ある)(居)〔三例〕

げかうす(下向) いそぎ(急) —

ぐす(具) — ありく(歩)〔三例〕・もてく(持来)・つみ(積) — 〔二例〕・めし(召) — もち(持) —

げちす(下知) — いふ(言)

ごらんず(御覧) — はぐくむ(育)

さたす(沙汰) — おくる(送)・とり(取) — 〔二例〕・はからひ(計) — まうし(申) — み(見) — 〔三例〕

てんず(転) — かふ(替)

これは、『あきぎり』よりも数・種類ともが多い(注七)。これらの用例を検討すると、以下に用例を示す複合動詞は、構成要素の漢語サ変動詞が含み持つ意味を明確に語形に反映させた、より説明的な複合動詞であることに気付く。

○げちしいふ(下知言)

・御しつらひのこと、たゞいまとかく下ちしいふべきことなければ、「御づしのたて所、衣かう、御きぬのかけやう、かくやあるべき」などにて帰ぬ。(とはすがたり・巻四・一八二頁)

○はからひさたす(計沙汰)

・(手紙ノ返信) いふかひなき北面の下らうふぜいの物などに、「一なるふるまひなどばし候」などいふ事の候やらん。
 さやうにも候はゞ、こまかにうけ給候て、はからひさたし候べく候。(とはすがたり・巻一・六一頁)

○まうしさたす(申沙汰)

・五だんのぐむだりの法は、をはりの国にいつもつとむるに、このたびはことさら御心ざしをそへてとて、こむがう
どうじの事も、大納言申さたしき。(とはすがたり・巻一・一四頁)

○みさたす(見沙汰)

・兵部卿、善勝寺などに、「大納言がありつるおりのやうに、見さたして候はせよ。しやうぞくなどは、かみへまいる
べき物にて」などおほせ下さるゝは、かしこきおほせごとなれども、(とはすがたり・巻一・三九頁)

「げちしいふ」は「げちす」が含み持つ「発言スル」といった意味を語形に反映させた複合動詞、「はからひさたす」
「まうしさたす」「みさたす」はそれぞれ「さたす」が含み持つ「処置スル」「発言スル」「世話スル」といった意味を語
形に反映させた複合動詞であると考えることができる。

こういった造語法自体は平安時代和文にもみられるものであるが、構成要素に漢語サ変動詞を用いている点が特徴的
であるといえる。

へいわゆる漢文訓読語を構成要素に持つもの

ここに属する複合動詞には次のようなものがある。

かきをはる(書終)

一方、これと類義と思われる「かきはつ(書果)」も一例用いられており、両例とも宿願により経文の書写を完了しよ
うとしている場面で用いられている。このことは、漢文訓読語の和文への浸透、あるいは和文語・漢文訓読語といった
区別の曖昧化の事象としてとらえることができよう。

○かきをはる(書終)

・はんにや経の残り廿巻を、ことしかきをはるべきしゆく願、としごろ、熊野にてとおもひ侍しが、いたく水こほら
ぬさきにとおもひたちて、なが月の十日頃にくまのへたち侍しにも、(とはすがたり・巻五・二三九頁)

『とはすがたり』の複合動詞

○かきはつ（書果）

・しゆくぐわんにて侍ば、まづこのやしるにてげんきやうののこり、いま三千くわんをかきはてまいらせんと思て、なにとなく、かまくらにてちと人のたびたりしたびごろもなど、みなとりあつめて、又これにてきやうをはじむべき心ちせしほどに、（とはずがたり・巻四・一九〇頁）

四 おわりに

以上、述べてきたことをまとめると、以下のようになる。

まず、『とはずがたり』の複合動詞語彙を数量的に概観した結果、次の事柄が明らかになった。

○『とはずがたり』の複合動詞語彙は『あきぎり』と比較して、平安時代和文（とくに日記作品）との一致度が低い。これは、『とはずがたり』が和文語彙を特に制約なしに用いていることを表わすものであることを指摘した。

この点が物語作品と日記作品との文体差を表わしたものであるかどうかについては、今後他の作品の検討を通して明らかにする必要がある。

○『とはずがたり』の複合動詞語彙は、『あきぎり』との一致度が低い。特に平安時代和文にみられない複合動詞の一致度が低い。このことは、日記作品と物語作品といった文体差によって、用いられる複合動詞語彙に相違が現われることを示しているようにも見える。この点についても、今後他の作品の検討を通して明らかにしてゆく必要がある。

次に、平安時代の日記作品とのみ共通して用いられる複合動詞を検討した結果、次の事柄が明らかになった。

○これらの複合動詞は、いずれも平安時代の日記作品と同じ意味用法で用いられていることが明らかになった。これらは時代による変化が起こらなかった部分であるといえようが、それが二十語しかみられないということは、

日記作品の複合動詞は時代による変化が激しい、あるいは作品ごとの相違が大きい、ということを表わしているのではないか。今後、他の日記作品の複合動詞語彙についても調査を行ない、日記作品の複合動詞語彙の特徴について考察する必要がある。

最後に、平安時代和文に用いられない複合動詞を検討した結果、次の事柄が明らかになった。

○漢語サ変動詞を構成要素に持つものについて

『あきざり』よりも数・種類ともに多い。用例を検討した結果、いくつかの複合動詞は、構成要素の漢語サ変動詞が含まれ持つ意味を明確に語形に反映させた、より説明的な複合動詞であることがわかった。こういった造語法自体は平安時代和文にもみられるものであるが、構成要素に漢語サ変動詞を用いている点が特徴的であるといえる。

○いわゆる漢文訓読語を構成要素に持つもの

『とはずがたり』では「かきをはる(書終)」が該当する語例として指摘できる。一方、これと類義と思われる「かきはつ(書果)」も用いられており、両例ともよく似た場面で用いられている。このことは、漢文訓読語の和文への浸透、あるいは和文語・漢文訓読語といった区別の曖昧化の事象としてとらえることができよう。

今後の課題は山積しているが、他の作品の複合動詞語彙についても同様な調査を行ない、和文の複合動詞語彙に存する時代差・文体差を究明してゆきたい。また、数量的な面からのみでなく、個々の複合動詞の意味用法の面からも分析を進めてゆく必要がある。

注

(1) ここでいう「文体差」とは、具体的には「物語・日記・和歌」といった文学ジャンルの別に近いが、本稿では、和文体の内部に存する言語的特徴として捉え、このように呼ぶこととする。また、和文体に限定して考察するのは、「時代差」を検討す

るにあたり、平安時代から鎌倉・室町時代までの長い期間に遍在する散文文献として、まず和文体の文献から検討するのが妥当であると考えたためである。

(2) 拙稿『あきざり』の複合動詞語彙にみる時代差と文体差（『鳥取女子短期大学研究紀要』第三九号・平成十一年六月）において、本稿と同様の検討を行なった。

(3) 本発表でいう「複合動詞」とは、「動詞連用形+動詞」という形態のものをさす。ただし構成要素が接頭語化したものや、補助動詞化したものも含める。また、構成要素間に係助詞・副助詞・敬讓の助動詞や補助動詞が介在したのも複合動詞として扱う。これに関しては拙稿「複合動詞の構成要素間に介在する係助詞の意味機能——『源氏物語』を対象として——」（『山口国文』

第二一号・平成一〇年三月）を参照されたい。

(4) 検索文献は以下の通り。

・校異は、検討に影響を与えるような重大なものについては、できるだけ掲げた。

・用例は、テキストの本文が底本の文字遣いをルビ等で残している場合にはそれに従った。

○竹取物語（上坂信男編『九本対照 竹取翁物語語彙索引』笠間書院・昭和五五年）○伊勢物語（大野晋・辛島稔子編『伊勢物語総索引』明治書院・昭和四七年）○大和物語（塚原鉄雄・曾田文雄編『大和物語語彙索引』笠間書院・昭和四五年）○平中物語（曾田文雄著『平中物語』研究と索引』溪水社・昭和六〇年）○土左日記（小久保崇明・山田肇徹編『土左日記本文及び語彙索引』笠間書院・昭和五六年）○蜻蛉日記（佐伯梅友、伊牟田経久編『改訂新版 かげろふ日記総索引』風間書房・昭和五六年）ただし本文は岩波新大系による。○多武峯少将物語（小久保崇明編『多武峯少将物語 本文及び総索引』笠間書院・昭和四七年）○宇津保物語（宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引』笠間書院・昭和四八年）○落窪物語（松尾聰・江口正弘編『落窪物語総索引』明治書院・昭和四二年）○枕草子（田中重太郎編著『校本枕冊子』古典文庫・昭和二八年、三一年）ただし三巻本の本文を示し、適宜句読点・カギ括弧を付す。○源氏物語（池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社・昭和二八年〜三一年）ただし本文は岩波新大系による。○紫式部日記（今西祐一郎・上田英代・村上征勝編『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社・平成九年）ただし本文は岩波新大系による。○和泉式部日記（東節夫、塚原鉄雄、前田欽吾編『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭和三四年）○更級日記（東節夫、塚原鉄雄、前田欽吾編『更級日記総索引』武蔵野書院・昭和

三一年)ただし本文は岩波新大系による。○夜の寢覚(阪倉篤義、高村元継、清水富夫編『夜の寢覚総索引』明治書院・昭和四九年)○狭衣物語(塚原鉄雄、秋本守英、神尾暢子編『狭衣物語語彙索引』笠間書院・昭和五〇年)○浜松中納言物語(池田利夫編『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院・平成元年)○篁物語(小久保崇明編『篁物語 校本及び総索引』笠間書院・昭和四五年)○堤中納言物語(土岐武治著『堤中納言物語 校本及び総索引』風間書房・昭和四五年)○栄花物語(高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』武蔵野書院・昭和六一年)○大鏡(秋葉安太郎著『大鏡の研究』桜楓社・昭和三六年)○讃岐典侍日記(今小路寛瑞、三谷幸子編著『校本 讃岐典侍日記』初音書房・昭和四二年)ただし適宜句読点・カギ括弧を付す。

(5) 本稿では『枕草子』を「日記」作品として扱った。女性作者による、作り物語ではない作品であり、作者の日常生活・体験の描写を含むという点で、本発表の目的上、独立した分類枠(例えば「随筆」)を設けるよりも、日記作品に含めて考えるのが適当であると判断したためである。

(6) 『土左日記』に一例も用例がみられないが、これは『土左日記』の作者が男性であるからなのか、作品の言語量が少ないからなのかは即断できない。ただし、表の数値は作品の言語量にほぼ対応しているようである。

(7) 『あきぎり』には「いひさたす(言沙汰)」「うちえいず(詠)」「おもひあんず(思案)」「ぐしまあらず(具参)」の四語がみられる。

〔付記〕 本稿は、第二十四回鎌倉時代語研究会(平成十一年八月十二日、於広島大学)における口頭発表を基にまとめたものである。発表の席上、原卓志氏、柚木靖史氏をはじめ、諸学兄より貴重な御意見を賜わった。ここに記し、深謝申し上げる。